

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

小学生5・6年の部 優秀賞

母のように

広陽小学校六年

川本 かわもと

萌和 もえな

母は私にとって、たった一人の大切な存在だ。私の相談を真げんに考えてくれ、一緒にテレビを見たり話したりもしてくれる。私には母の自まんするところがたくさんあり、一つにまとめられないくらいだ。そんな母の仕事は、看護師だ。

看護師である母にたまに電話がかかり、仕事に行かなければならないときがある。その時、母は、母親の顔から、看護師の顔へと変わる。いろいろな顔があるのも、母の自まんできることの一つだ。そんな母を私は尊敬している。母を尊敬したり、大切だと思ったのは、次に話すことから思ったのかもしれない。

三年生の時に、私はけがをしたことがあった。集団登校の集合時間にもう少しでなるころだった。玄関にいたのだが歩くのがつらいほどだった。その日はちようど、母がいたので送ってもらおうと私は考えた。だが、母は姉を学校に送らなければいけないかった。二人も送ることは無理だった。私は知らなかったなので、少しけんかになり、私は泣いてしまった。その時、母は泣いている私を優しく抱きしめてくれた。その瞬間私は、涙が止まらなくなった。抱きしめてくれたことに母の優しさがつまっている、今になって思う。その後、母は薬をもってきてぬってくれた。そしてもう一度、抱きしめ、涙をふいてくれた。私が集団のところに行ったときはみんながまだいたので、おくれずに行けた。少し痛むが、母の優しさを思い出すと、また泣きそうになった。その日、私はおじいちゃんの家で、父がむかえにくるのを待っていた。その間、母への手紙を書いた。今日の朝のことの感謝、これからのことなど、一生懸命書いた。何度も言葉を考え直し、手紙を入れるふくろをつくった。母はその日、仕事の夜勤だったので、家に帰ってからあやまることも出来なかった。次の日、家を出る前に、机の上に手紙を置いて学校に行った。学校から帰ると、机の上に、母からの手紙が置いてあった。私はすぐにそれを読んだ。手紙を読むと涙が出てきた。

こんなことがあり、母のことを、「もっと大切にしよう」と思えるきっかけになったと思う。それと同時に、母を尊敬するようにもなった。母は仕事の顔ではなく、親の顔で私を抱きしめてくれたからだ。

その手紙は、今も残っている。最近それを見た時、「こんなこともあったな」と思った。その手紙には、私と母の愛がいっぱいつまっている。これからもその手紙を大事にしまっておきたい。

他にも、母の自まんするところがある。それは、人助けをすることと、誰とでも仲良くできるところだ。この前買い物に行った時ベビーカーに乗っていた男の子が、ぬいぐるみを落としてしまった。それに気づいて母は、すぐに拾いわたしてあげていた。そんな経験はいくつかある。この前も駅できつぷを買おうとしていたおじいちゃんが、落とした物を拾ってあげていた。近所の人も仲良しで、よく話している。旅行の時には、「写真とってください」と言われることがある。母には、話しかけやすく、優しいような雰囲気がある。そういう人に私はなりたい。私は人見知りなので、身近な人を目標にしながら前に少しづつでも、進んでいきたい。でも、目標というだけで、母を目標にしながらも、私自身の良さを見つけていきたい。私自身が変わること、他の人の良さも分かるようになると思う。私はそういう人になりたいと心から思う。

これらの話をして私は母をたった一人の大切な人であることを、今まで以上に感じた。母にとっても私を大切な人と思ってもらえるように努力して、自分らしく生きていこうと思う。自分らしさを見つけるためにも、他の人と協力したり、何事にも全力でしたり、自分から進んで行動していきたい。母にはそういうところが全部つまっているからこそ、仲良い人がたくさんいるのだと思う。母のまわりには人が寄ってくると思う。それは、母が信頼されているからだと思う。私も母を信頼しているから、大切に思えるんだと思う。そういう人にも私はなりたい。

母の自まんできるところはたくさんある。たくさんあることを言葉にして伝えていきたい。今でもけんかはするけど、できるだけしないようにしたい。私の思いを口に出し、母の思いも聞くことで、けんかは少なくなると思う。少なくなるように私は努力していく。

私の母は、世界でたった一人の、自まんすることがたくさんある大切な母親だ。